

『東明』

朝鮮洋楽の夢幻的来歴 3

(1922年12月10日付)

本来洋楽の輸入は両班たちの功労だと鼻高々にいい、公園を作りあげ、楽隊のために八角亭を建てておいたが、一般民衆の公益とはほど遠く、毎年約2ヶ月間は毎週木曜日の午後になると音楽演奏会を開催し、西洋人が各官庁官吏だけに公開した。それはそれでいいが、年が明け[1904年]ブラウン氏が解雇され帰国すると、日本人目賀田種太郎が度支部[後の財務部]顧問官となり①一般軍人の俸給制を改定し支給額を倍増することになった。それに伴い軍楽隊奨励に於いても大いに力を入れ、8000ウォンという大金が投じられ、各種の楽器を再びウィーンの楽器会社「ツィンマーマン」から購入し、楽卒には毎月初めに百ウォンの奨励金を支給した。それと同時に公園の周辺を拡張した後、八角亭は反響が甚だしく音響がよくないと、[1904年]現在藤を植えてあるところに20坪のユウガオの形をした木造大音楽堂を建て、公園を開放し、演奏会を開催する際にも公開した②。〈中略〉

これは、お上品ぶったソウルの御曹司からの出資であった。しかし、その後毎年修繕を疎かにされ、やがては崩れ落ちて跡形もなくなった。現在ある音楽堂は龍山駐劄軍軍楽隊[日本陸軍]が解散した後、龍山公園にあった音楽堂を移したのである③。その後も去年(1921)まで継続的に演奏を行ってきたが、今年だけは諸事情によりできなかったそうだ。しかし、こうした皇室

の恩寵と官憲の庇護で順調に成長した我が洋楽隊は、その栄耀栄華がわずか5年しか続くことなく、いつのまにか厄運に包まれた隆熙元年(1907)が訪れた。

隆熙元年8月!この時に何があったか。朝鮮が軍国主義から解放(?)された月であった。こんな言い方だと朝鮮が世界の思潮に先立ち、朝鮮の幸福はこれで永世に保証されたと思われるかもしれない。しかし、違う、大間違いだ。この月は、瀕死状態にあった朝鮮に最後の運命が強いられた時であった。朝鮮軍隊の解散!それは力により良民の護身具が奪われたことと同じである。いくら朝鮮の軍隊が紙冠木刀の兇戯に類するといえ、場合によっては懐剣程度にはなるだろう。兎にも角にも、隆熙元年の8月をもって朝鮮の軍隊はその幕を閉じた。

これで当時、血気盛んな半島の男児や悲憤慷慨の憂国の士の心事がどうであったか、今になっては言わずもがなである。とかく、朝鮮の軍隊が解散し、軍隊のない軍楽というのは青春の誇りを失い、墓穴へと入る老婆のチョゴリにつけられたノリゲ[装身具]であり、捧げ銃により敬礼する対象がないので、軍楽隊の音楽は何の意味があるのか。同年9月には創立5年を迎える我が洋楽隊④も同じ厄運から逃れることができず散り散りになり、残りの楽卒50人を何とか集め宮内部掌礼院附属として再編し、掌礼院音楽隊と名付けた⑤。軍楽卒は楽手と、軍楽隊長は楽師長と改称せざるをえなかった。このように、言わば世態が傾き、国歩はますます多難となったため、関内の待命はだんだん少なくなったことは明らかである。その上、これ以来は英親王からの御呼びもなく、さらに軍部と目賀田氏

が調達していた楽手奨励金さえ無くなった。

薄俸では生計を立てることができないため、活動写真[映画館]の楽手となるといういながら一人二人うやむやのうちに休職し、軍隊の衰運は一向に挽回できざる機会がなかった。それだけではなく、以前は公使官や大官が楽隊を使用しようとする宮廷の裁可が必要であったが、今は掌礼院卿の手中の物となったため、思うがままどこからも呼ばれるようになった。こうした状態で満3年が経って隆熙4年(1910)8月29日!日韓が併合され、50人の一中隊から5人を減らし、45人編成の一隊が李王職掌侍司へと移属された。また、4年をどうにか過ごしていたが、大正4年(1915)完全に解散させられた。しかし、ちょうどその頃龍山駐劄軍軍楽隊が解散することとなり、当分の間はさらに5名を減らした40人編成の一隊へ減縮し、堂侍司礼式課の管轄下に置いた。そして、毎年行われる4大宴会と毎週木曜日の午餐など総督府宴会にも応じさせ、さらに4、5月の1日[旧曆]には昌慶園の拝観客のために演奏させることで[軍楽隊は]僅かな残命が保持された。

しかし、その翌年(1916)にはエッケルト氏を解雇し、小宮次官の代りとして国分象太郎氏が李王職次官に就任した⑥。それ以降は、欠員が出ては補充しなかった。これは、油尽きて火消ゆという結果をねらったためである。極度に衰退していく中で、エッケルト氏は大正6年(1917)[ママ]旭町の自宅で突然逝去し楊花津に埋葬された。これは朝鮮洋楽の功労者であり指揮者であるエッケルト氏を失った楽壇にとって、決して他人事ではなかった。翌年(1918)の9月には、李太王殿下が在

位時代に内蔵院秘庫から下賜した例の4000ウォンをエッケルト氏から受け継ぎ、楽隊員一同に配り、ついに楽隊は解散することになった。解散時の人員は僅か30人あまりであった。有為転変とは世の習いだが、あまりにもはかないため、じつくりと我が楽壇の過去20年史を回顧する際に、今昔の感に堪えない。

関忠正が自ら楽器を輸入したことも決して簡単なことではなかった。これで、朝鮮人には音楽的才能があることを発見してくれたこの洋楽隊が今日廃止され四方へ散り散りになり、その跡形さえ薄れている。誰もが同情の涙を禁じ得ず、誰が愛惜の情を抑制することができようか。また、我が洋楽隊の盛衰が一途にその内面の国情と並行していることを考えると実に、悲哀の念を禁じ得ない。